

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アジアの狩猟採集民への新たなまなざし：
移動と生業の人類史＜共同研究：
アジアの狩猟採集民の移動と生業：
多様な環境適応の人類史＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2023-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00010017

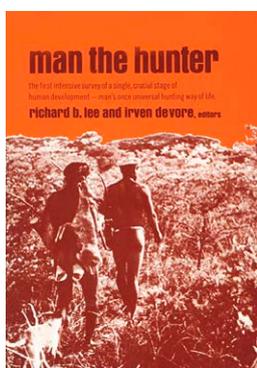
アジアの狩猟採集民への新たなまなざし

—移動と生業の人類史

池谷 和信

なぜ、アジアの狩猟採集民に着目するのか

今から半世紀以上前の1965年に、アメリカのシカゴにおいて世界で初めて狩猟採集民を研究対象とする研究者が集って会議が行われた。その成果は『man the hunter』(Routledge, 1968年)という本に収められている。



man the hunterの表紙

目次構成

1	イントロダクション
2	生態と経済
3	社会とテリトリー組織
4	オーストラリアにおける婚姻とモデル
5	人口統計と人口生態
6	先史時代の狩猟採集民
7	狩猟と人類進化
8	原始性の概念

そこには、クロード・レヴィ=ストロース、ルイス・ビンフォード、マーシャル・サーリンズなどの研究者の名前が並び、世界の狩猟採集民研究の第一歩となる基礎資料として、現在は位置付けられている。このように会議の成果を出版する伝統は、国際狩猟採集民会議（以下、CHAGS）のなかで受け継がれて現在に至っている。過去13回にわたる会議をとおしてみると、個々の狩猟採集民を対象にしてその生態、社会、歴史、政治、経済など研究のテーマは多様化し、研究も活発化しているようにみえる。

しかしながら、世界的視野でこれらの研究をみても、アフリカや南北アメリカ、オーストラリアの狩猟採集民の研究が体系化されつつあるのに対して、アジアの狩猟採集民の研究は英語論文以外が多く、その全体像を掴むのが難しい。とくにアジアには、北はツンドラやタイガから南は熱帯雨林やマングローブ林まで多様な植生が広がっており、更新世の

植生は異なっていたとはいえ、チベット高原や島嶼部における適応の術はよくわかっていない。同時に、更新世の時代には私たち人類（ホモ・サピエンス）以外にもネアンデルタール人やデニソワ人やフローレンス人などが暮らしていたといわれる。アジアにおいて現生人類のみがどうして残ったのか、その理由も解明されていない。

そこで筆者は、このような問題意識のもとにマレーシアのペナンで開催された第12回 CHAGS にて「アジアの狩猟採集民」のセッションを設けることにした。その結果、日本国内の考古学・民族学の研究者のほか、米国やロシア、タイなどの研究者も参加し、その成果はSESの英文論集として刊行することができた (Ikeya and Nishiaki eds. 2021)。本共同研究では、この論集の成果をふまえてさらなる研究の展開を図り、先史時代から現在までの狩猟採集民に注目して、彼らの環境適応の在り方を把握することが目的である。

アジアの生態地域と時代区分

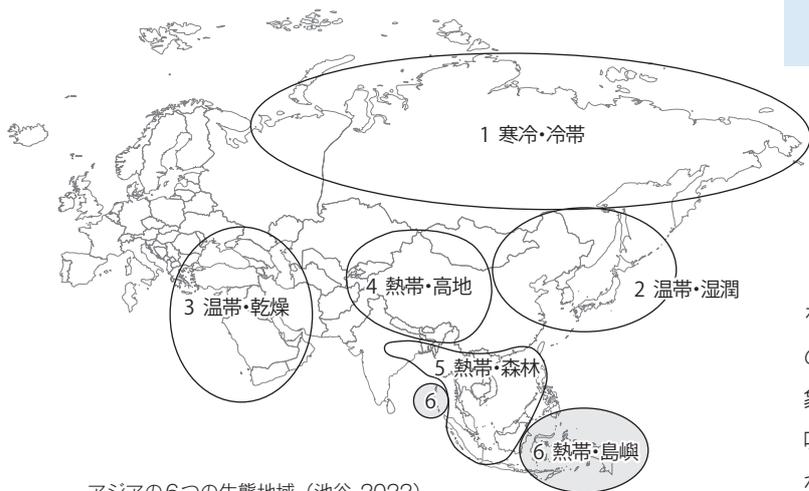
アジアの狩猟採集民の人類史は、どのような地域を設定し、どのように時代区分することで把握できるのだろうか。アジアの地理と歴史から研究の枠組みを提示する。

まずアジアの自然環境は、①寒冷・冷帯、②温帯・湿潤、③温帯・乾燥、④熱帯・高地、⑤熱帯・森林、⑥熱帯・島嶼の6つの生態地域に便宜的に分けることができる (池谷2022)。一方で、時代区分については、①多様な人類が共存した更新世、②農耕や家畜飼育の開始以降の完新世、そして③都市発生以降の文明、という3つに分けることができる。これらは、狩猟採集民の時代、農耕民との共生関係や農耕民への同化の時代、前近代・近代における国家形成および市場経済の時代に対応している。

つぎに、先史時代から現在までのアジア狩猟採集民を対象とした事例研究をこれらの枠組みからみると、民族誌研究において多い⑤熱帯・森林地域、考古学研究において多い②温帯・湿潤、および③温帯・乾燥地域など、分野によって研究地域の偏りを指摘することができ、両分野のアプローチによる成果を同時にみられる地域はほとんどない。④熱帯・高地に至っては、考古学や民族学の研究があまりにも少ない。本研究では、基礎資料における地域的・時間的な偏りをふまえて、どのようにアジアの狩猟採集民の全体像を構築していくかが問われることになる。

池谷 和信 (いげや かずのぶ)

国立民族学博物館人類文明誌研究部教授。専門は環境人類学、人文地理学。著書に『トナカイの大地、クジラの海の民族誌—ツンドラに生きるロシアの先住民チュクチ』（明石書店 2022年）、『人間にとってスイカとは何か—カラハリ狩猟民と考える』（臨川書店 2014年）などがある。



アジアの6つの生態地域（池谷 2022）

移動と生業にかかわる枠組み

狩猟採集民の多くは、遊動民ノマッドであった（池谷 2017）。しかしながら20世紀に民族誌研究が開始されたころには、社会主義国や欧米の植民地における近代化政策のもとでノマッドの定住化が浸透した地域が少なくない。このため、ノマッド時代の移動や生業を把握するには、探検家や植民地行政官による記述に依存しなくてはならないであろう。例外的に、⑤熱帯・森林地域や⑥熱帯・島嶼地域では、現在においても遊動狩猟採集民が確認されている。彼らの社会は近隣の集団との関係を保ちながら維持されており、ノマッドの民族誌において、かつてのノマッドの実像を探るうえで有効な基礎資料となるであろう。

たとえば、人類によるノマッドの移動に注目する場合、便宜的に3つのタイプが提示される。すなわち、遊動、移動、半定住が挙げられる。更新世の時代には、遊動ノマッドの比重が大部分を占めるが、農耕の導入によって移動ノマッドが形成された可能性が考えられる。ただ、考古資料からはこれらの違いを判別することが難しい。考古資料の場合、本拠地か狩猟キャンプかの認定が難しいことに加え、世界的視野からの対象地域の位置づけが必要であろう。



定住地での食物分配（2005年、タイ、筆者撮影）

一方で、狩猟採集民の生業については、狩猟や採集、漁撈を軸とした、動植物などの自然資源の利用実態や、生業複合の担い手など、各地の民族誌の内容も豊かである。狩猟は対象とする動物の生態や行動に応じて猟具が異なっており、槍、吹き矢、弓矢、罠、落とし穴、犬の使用のほか多様な形が知られている。採集は陸域の植物採集と潮間帯での貝類の採取などに分かれるが、これらが上述した6つの生態地域のなかのどこで行われるのかも興味深い課題である。さらに漁撈はサケやマスの場合、アイヌのアマックのように回遊魚を対象にした漁具が発達している。これらもまた地域の特徴を示している。

アジア狩猟採集民の適応モデル

以上、2022年10月に開始した筆者が代表する共同研究の目的や方法を紹介してきたが、現時点ではアジア狩猟採集民の全体像を理解するための枠組みを提示したにすぎない。研究テーマや対象地が広すぎてあまりにも空白地域の多い研究でもある。今後、各生態地域に焦点をあて、時間軸を明確にした環境適応の形を明らかにしなくてはならないだろう。地球上で最も植生の多様なアジアに焦点を当てることで、冒頭で言及したようにアジア狩猟採集民の環境適応に関する独自性を見出すことができるかもしれない。

本研究では、ほかの人類が滅亡してどうして現生人類が生き残ったのかを解明するという問題意識を持っている。狩猟採集民は、言語、絵画、ダンス、神話、ビーズなど、現在までつづく人の土台となる文化の創造者であり担い手である。同時に、オセアニアの地域の大部分を除いて世界中に拡散することに成功した地球の先住者である。今後、本研究によって、私たちホモ・サピエンスという人類と過去に存在したほかの人類との共存関係の方法、ほかの人類の滅亡過程とその要因を知ることができ、そこからこの社会の未来を展望することができるであろう。

引用文献

- 池谷和信 2022 「狩猟採集民の生存戦略—移動と環境適応」 稲村哲也ほか編『レジリエンス人類史』pp. 227-242, 京都：京都大学学術出版会。
- 池谷和信編 2017 『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』 東京：東京大学出版会。
- Ikeya, K. and Y. Nishiaki (eds.) 2021 *Hunter-Gatherers in Asia: From Prehistory to the Present* (Senri Ethnological Studies 106). Osaka: National Museum of Ethnology.